

2 小学校高学年における教科担任制の推進





義務教育の目的・目標を踏まえ、育成を目指す資質・能力を確実に育むためには、各教科等の系統性を踏まえ、学年間・学校間の接続を円滑なものとし、義務教育9年間を見通した教育課程を支える指導体制の構築が必要です。各教科等の学習が高度化する小学校高学年においては、日常の事象や身近な事柄に基礎を置く小学校における学習指導の特長を生かしながら、中学校以上のより抽象的で高度な学習を見通し、系統的な指導による中学校への円滑な接続を図ることが重要です。

I 先進的な取組事例

学級担任間の授業交換や中学校教員によるいわゆる乗り入れ授業、加配教員の活用などの取組を各地域や学校の実情に応じて組み合わせて実施することが大切です。

学級担任間での授業交換+専科による教科担任制

- ・道徳科、特別活動、総合的な学習の時間は学級担任がそれぞれ指導
- ・上記以外の教科は分担して指導

【1組】	【2組】	【3組】	外国語専科
学級担任 (学年主任)	学級担任	学級担任	外国語専科
			
音楽 図画工作 家庭、体育 25h/週	算数 理科 28h/週	国語 社会 28h/週	外国語

日 30分 × 年 200日 = 100.0 時間/年
※担当1人あたりの目安

【先進的な取組事例】

II 取組の効果

- 授業の質の向上
教師の担当する教科数の減少、授業外の時間の増加に伴う教材研究の充実や、同じ授業を複数回実施することによる授業改善が図られ、児童の学習内容の理解や学力に高まりが見られています。
- 小・中学校間の円滑な接続
児童が安心して進学し、中学校に進学した際に、学習・生活に順応しやすいといった点で小・中学校間の円滑な接続に寄与している状況が見られています。
- 多面的な児童理解
複数の教師が教科指導に当たることを通じて、多面的な指導・支援ができるほか、学級担任以外にも相談できる体制が整備されています。

○ 教師の負担軽減

学級担任が授業交換を実施する場合を含め、特定の教科の授業を行わないことで、教材研究の充実など、授業準備の効率化につながっている状況が見られています。

専科と学年内での教科担任制を組み合わせることで、空きコマができることが、時間の削減効果としては一番大きいです。

小学校は準備をしなければいけない教科数が多いので、授業交換することにより、準備の時間が削減され、時間を他の業務に割けるようになったのはよかったです。

学級担任1人ではなく、複数の先生の手で子どもを見ることで、それぞれのよかったところや課題について、多様な視点で見られるようになり、子どもの状況を把握しやすくなりました。

【先生の声】

III 留意すべき事項

- ・学級担任が全ての教科を教えることにより、教科横断的なカリキュラム・マネジメントが効果的に行われてきたという利点が損なわれることのないよう、組織的・教科等横断的な教育課程の編成・実施が可能となるようにすることが大切です。
- ・専科教員が担当する教科も含めて、教師が当事者意識をもって指導する全ての教科等の目標や内容について幅広く理解し、広い視野で指導を行うことができるようにすることが大切です。

〔参考資料〕

・小学校高学年における教科担任制に関する事例集～小学校教育の活性化に繋げるために～(令和5年3月 文部科学省)



・義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方について(報告)(令和3年7月 文部科学省)



・改訂版 全国の学校における働き方改革事例集(令和5年3月 文部科学省)

